
メインの前のサブ

素浪人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メインの前のサブ

【Nコード】

N4789BA

【作者名】

素浪人

【あらすじ】

俺は例によって神様のミスで殺され、別の世界に転生する事になった。

だが俺の行きたい世界は現在定員オーバーらしくしばらく待たないといけないらしい。（数十年単位）

と言うわけで待ち時間に他の世界で過ごしておけという事で俺はFXの世界に行く事になってしまった。

プロローグ・神様からのお願い

神様からの転生、本当にあるとは思わなかった。

「すまんかったのう、お詫びに好きな世界に転生させてやろう」

「好きな世界か、なら『リリカルなのは』の世界のミッドチルダに転生させてくれ！」

「うむ……なるほど、のう」

神様が手に神をポンツッと出した後、それを見て呻く。

「どうしたんだ？」

「どうも今その世界は生命が満員らしくての、予約などもあって今すぐは無理のようじゃ、……他の世界にせんか？」

「い・や・だ！ 俺は魔法を使ってみたいんだから！」

断固拒否であるデバイスっていう相棒も出来るしきつと楽しいはずだ。

そんな所に行かないわけが無い！

「仕方ないのう、では長くなりそうなので、代わりの世界に一度転生しておくのはどうだ？ ちょっと死にやすい世界だが経験を積むには抜群じゃぞ？」

「うーん転生って一度だけなんだよな？ その死にやすいって世界

に入ったらリリカルなのは世界に行けなくなるってのはないんだよな？」

「もちろんじゃ、その世界での命が終わったら改めてリリカルなのは世界に送ろう。今度はわしの方で予約しとくんで大丈夫じゃ」

「本当かよ、まあいいや、じゃその世界よろしくー」

「あい分かった。では頑張ってくるのじゃぞー」

神様が話した後意識が飛んでいく、そのさなか特典の事を忘れていた事を思い出していた。

1. シンの猛攻（前書き）

時代が合っていないかも

1. シンの猛攻

赤ちゃんの頃から意識があります。どうやら転生は成功したようだ。

今世の俺の名前は「ベルゲミーネ」。村ではクールな子供で通っている。

そんな『男』に生まれた俺だが、はてさてどうするか？　とりあえずは普通に過ごすべかな。

俺の話を聞いてくれ。

俺はポルト＝キーリカに生まれ、愛情たっぷりの両親に囲まれ、すくすくと成長し、いまや15歳となった。

ここまで生きてようやくこの世界のあり方が分かってきた。

この世界、『スピラ』は死の世界だ。今は比較的活動が緩やかだが『やつ』が動くと大量の人々が死んでいく。

そんな『やつ』人々は恐怖し、救いを求めてエボンを崇拝する。

いつの間にか慣れてしまったエボンの祈りもその証の一つだ。『スピラ』でエボンを信仰しない者はほとんどいない。

……いや、忘れていたが奴らが居た。『アルベド族』だ。

アルベド族は失われた技術の結晶である『機械』を用いる。これが実はエボンの教えに反している。

エボンでは、『やつ』が機械を使っている町などを狙って襲っているという説がある。意外と信憑性のある説であり、これは既にエボンでは常識レベルになっている。よってエボンでは機械を使わない

ようにしようという教えが出来たわけだ。

なのにも関わらずアルベド族の連中はそんな事はお構い無しにどんな機械を使う。さらに持ってなければ発掘してまで使うのだ。さすがはオタク族（おれ命名）である。

さて、話は戻り、『やつ』であるシンについて話そう。

シンとはこのスピラ中に災厄を振りまく恐ろしい魔物である。

生で見た事は無いが、スフィアの映像では見たことがある。あ、スフィアとは映像などを見せてくれるなんか良く分からない物だ。

そのシンだが、普通の方法では倒せない。ではどうやって倒すかというと、召喚士による『究極召喚』で倒すらしい。

シンは基本的に『究極召喚』でのみ倒す事が可能であり、過去の召喚士たちもそうやって倒したらしい。

ん？ 倒したなら何故今もシンがいるのかって？

それはシンは復活するからだ。シンは不滅。ゆえに『倒しても』最終的には復活し元に戻る。

それじゃあ倒したことも無駄じゃないか？と思うが、実はそうじゃない。

シンは倒した後しばらくの間、一切出現しなくなるのだ。何が理由かは分からないが、たとえば機械を使っていたとしても一切出現しない。これは過去に証明されている。

このシンを倒して、復活するまでの期間。これを『ナギ節』と呼ぶ。人々はシンの恐怖から解放されるナギ説を求め、それをもたらしにくれた召喚士を大召喚士と呼び、多大な感謝を捧げる。

現在大召喚士は3人。全員既に故人だ。実は二人目の大召喚士はキーリカ出身である。キーリカ島に住んでいる者たちの大きな自慢となっている。

とまあ長々と話をしたが、何が言いたいかというとだ。

「はあ……」

周りを見渡す。

元々俺の家があった場所は既に無い。そう、シンがやってきたのだ。シンの猛攻はこの村を壊滅にまで追い込んだ。海岸にあった家々は全て無くなり視界にあるのはただの海だ。俺たちはこれからここにまた新たなポルト＝キーリカを作っていかなければならない。それが先人が通ってきた道のりだからだ。

「はあ……」

今回の災害でポルト＝キーリカの人口は4分の1にまで減ってしまった。

この状況にさっきからため息が止まらない。昔からここに住んでいた人はこれを幾度と無く繰り返した来たのだろうか。よく諦めなかったものだ。

さらに災害は俺自身の身近な人も奪っていった。……そう、俺の両親だ。

昔から優しくかった両親だが、エボンの教えに懐疑的だった俺を良く叱っていた。

それはそんな俺を良く思っていなかったわけではなく、そのような態度を取るのを人に見られた時に困るからこそ心を鬼にして叱ってくれていた。前世の知識に引っ張られ、突拍子も無いことをする俺を、両親は深く愛してくれた。二人は俺の最高の大切な人たちだった。もう会えない事が酷く辛い。

「もう会えないと言う事がこんなに辛いなんてな」

生前の幕は俺の死亡で閉じた。それまで親しい人は誰も死んでいな

かった。

だからこそ、この辛さが本当に応える。

思考は俺の死にまで飛ぶ。俺はこの辛さを友人たちにも与えてしまったのか、と。

罪悪感と喪失感がごちゃ混ぜになる。今日はもう何も考えられない。

生き残った者達は海岸で途方に暮れている。

シンはポルト＝キーリカをぼろぼろにし、去っていった。この事実だけが人々の安心を与えた。

生き残った仲の良かった友人は隣の家の人メト、そして反対側に住んでいたルチルの二人だけだ。

俺たちはキーリカ島内に存在する寺院に重たい足を引きずりながら向かう。

今日からここを拠点に数年を掛けてキーリカを再生させていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4789ba/>

メインの前のサブ

2012年1月13日01時51分発行